

21世紀を築く力——ソクラテス、カントの英知に学ぶ

石神 豊

※本稿は、2015年10月15日、東京・新宿区のTKP市ヶ谷カンファレンスセンターで行われた講演の内容をまとめたものです。

はじめに

ご紹介いただきました石神です。きょうはお集まりいただき、ありがとうございます。

「21世紀を築く力——ソクラテス、カントの英知に学ぶ」、少し大きすぎたテーマかなと思っています。む

しろ、手早く財産を築く力とか、あるいは、なんとか今年を乗り切る力とか、このほうが身近なテーマかもしれません。残念なことに哲学者はあまり論じていません（笑）。

じつは今回このテーマを掲げたのは、私としてずっと思ってきたことがあったからなのですが、それは一言でいえば、21世紀はどこへ向かっているのだろうかということ。始まってすでに15年経ったわけですが、これまでもいろいろと厳しい出来事がありました。

振り返ってみますと、きっと素晴らしい新世紀が始まるのだろうと少し淡い夢を見ていたようにも思うのですが、21世紀が始まってすぐに同時多発テロといわれる大きな事件がアメリカで起こりました。それからちょうど10年後に、今度は東北地方で大震災がありまして、また、その間にはリーマンショックという世界的な金融危機も生じました。人為的・自然的と、とにかく大規模な災害・災難が続いたわけです。また中東の情勢は20世紀から引き続き、ますます混乱を深めているように見えます。

こうして15年を経てきたのですが、はたして今後、時代はどうなっていくのか、そう思われている方も多いのではないかと思います。きょうは、そうした21世紀という時代をどう考えたらよいのか、あるいはどのような問題が根本にあり、私たちはどのように生きていくべきかということについて、できるだけ身近な視点から考えてみたいと思います。これは私だけでは手に負えませんから、哲学の英知に学ぼうということで、とくにソクラテスとカントに出てきてもらい、いろいろ

ろと学びながら皆さんと共に考えてみたいと思う次第です。

あとでまた少しお話ししますが、東日本大震災を経験された哲学の先生に岩田靖夫先生という方がおられます。私も東北大学の大学院に学び、先生にもいろいろお世話になりました。その先生が、今年の初めに震災の体験に学ばれたことをひとつの本として出されました。そこでいわれているのですが、「この大災害は、人間の生き方を根本から考え直す機会を人類に与えた」というのです。そういう視点から災害の体験を考えられたのです。

人間がものを深く考えるきっかけとなるものは、やはり自身が体験した事柄について深く問いを発することにあるのだと思います。そうしてみると、大きな災害であつてもたんにネガティブにとらえるのではなく、私たちの生き方にひとつの大きな問いかけをもたらすものとして、むしろ積極的にとらえなおすということもできるように思うのです。これまでも人間学を深く探究してこられた先生でしたが、極限的な体験のなか

に、ある真実を感じ取られたのだと思います。じつは今日の私のテーマも、このことが動機として背景にあります。

文明論的時代としての現代

21世紀がどういう時代かということですが、現代とくに際立つ面について、感覚的でない方になりますが一とつだけいいますと、社会の外は華やかだけれども内側は必ずしもそうではない。あるいは、人間のあり方、生き方がかなり危ない状況に來ているのが現代だといえるということです。

「危機の時代」といういい方は使い古された表現で、なにか危機感を煽り立てるような感じもあるのであまり使いたくはないのですが、現代は文明の深層というか奥のほうで、やはりそういうわざるをえない状況があると思うのです。つまり現代は、人間の生き方にかかわる、あるいは文明の転換にかかわる意味で「文明論的時代」だといってよいと思います。

‘To be or not to be’ という言葉、シェークスピアの

『ハムレット』ですね。いろいろな訳があるようですが、「生きるべきか死ぬべきか」という訳が多く流布しているようです。ある意味で、この言葉は私たちの21世紀のことをいつているのではないかとも思います。「生きるべきか死ぬべきか」というのは、かなりシリアスな表現です。

そこで、皆さまもご存じかと思いますが、池田大作先生と歴史家トインビー博士との対談集があります。対談は1972年、73年にありまして、75年に本となつて出版され、日本語版と英語版の両方がほぼ同時に出了ました。日本語版のほうは、『21世紀への対話』となっています。ところが、英語版のほうは *Choose Life* となっています。「生を選べ」という意味です。この言葉は旧約聖書の申命記からとった言葉のようですが、英語版のタイトルは、ハムレットの言葉のように、生と死の選択を直接に現代の問題として提起しているという印象を受けます。つまり、この対談は、「21世紀において（死ではなく）生きることを選ぶべきである」という、かなり鮮烈なメッセージをもっているといつてよ



いのです。

その意味で、池田・トインビー対談は、まさにいまこそ読むべき書物だと思います。たんなる文明についての和やかな対話というより、むしろ「危機の書」というか、ひとつ間違えば自分も含めて生死を分かつことになる、そういう危機意識に立った根源的な問題提起の書として読むべきだと私は考えています。

ちなみにこの本は、多くの各国語版があります。現在28言語に訳されているとのことです。欧州系のものなどは、英語版と同じ「生を選べ」という表題です。アジアでは日本語版と同じ表題がいくつかありますが、全体として英語版からの訳が多いようです。私も授業でドイツ語版と英語版を学生と読んでいます。少しず

池田・トインビー対談は、これまで28言語で発刊されている。写真はその一部。上段左からヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・英語・クロアチア語・ドイツ語版、中段左からシンハラ語・タイ語・ブルガリア語・韓国語・トルコ語・ロシア語版、下段左からスワヒリ語・イタリア語・中国語（繁体字）・ハンガリー語・チェコ語・フランス語版

石神氏は、創価大学文学部の元学部長。東洋哲学研究所では主任研究員として「文明論プロジェクト」を推進している。



つしか進みませんが、いまさらながら内容の濃さに圧倒されます。

1 現代の問題と哲学の役割

それでは今日の本論に入りたいと思います。とくに現代の問題が何であり、それから哲学が何を教えてくれるのかということです。まず、現代の問題です。現代社会にはふたつの性格と問題があります。ひとつは、「科学技術社会」という性格づけができますといえます。あるいは、「知識社会」といってもよいでしょう。高度な（というよりむしろ氾濫する）知識の社会、複雑な制度や法律もここに入れてよいでしょう。これが現代社会のひとつの性格です。もうひとつは、最近話題になることも多いのですが、「高齢化社会」といわれる高齢者が多くなった現代社会の性格です。

もちろん他にも取り上げるべきものはありますが、とくに身近に感じるものとして「科学技術」と「高齢化」を取り上げました。

私たちが問題を考える際に、ただ題目を聞いて、「あ

あ、そういうものか」ということではなくて、やはり自分のものとして考える、身近な問題として考えることが大事かと思えます。そうした観点からこのふたつの現代社会の性格を考えてみると、問題点のありかはつきり見えてきます。

ひとつは「科学技術」の問題として、環境問題あるいは核問題といった問題をあげることもできますが、ここでは基礎的な問題としてとくに「高度知識社会」の問題点をあげたいと思います。知識が無限に分化（大量化）、専門化することで、人がもはやその処理能力、キャパシティを超えてしまい、ついには科学技術の奴隷、知識の奴隷となってしまうという問題です。かつては技術や知識は伝統的に特殊な階層の人のものであって、ある意味ではコントロールできていたのですが、現代はすべての人が入手可能でし、アクセスできる時代です。その意味では民主的になったといえなくもないのですが、じつは無政府状態といった状況です。すべての人たちがいまや機械に制御され、自分の内なる能力を磨こうとはしなくなる。こうして現代は、

科学技術、高度知識の奴隷になっている時代といつてよいと思えます。情報機器を使った犯罪が増えているという事実も、このことを裏付けているといえます。

もうひとつは「高齢化社会」の問題点です。多くの人々が生活の不安を抱えつつ孤立するという問題がいま増加しています。年齢とともに身体的な不自由さが増すのは仕方がないとしても、多くは経済的な面や身体的な面での心配も増え、さらに人との交わりが少なくなり、精神的にも孤立感が増すことで、さまざまな心配だけを抱えたきわめてさびしい老後生活を送る人が増えているわけです。また、青年は自分の問題が別にあり、それだけで手一杯ですから、高齢者の問題に積極的にかかわることはなかなか難しいといえます。近親者の介護をめぐる種々の問題や事件が起こっていることもご存じの通りです。

自己満足と他者不干渉

こうした具体的な問題点の背後に、じつはかくれた真の問題があるのです。それは、そうした状態をよし

とする一見現代風の考え方です。もう少しはつきりいいますと、ひとつは「自分はそれほど努力しなくてもよい（あるいは努力したくない）」とする自己満足的な考え方であり、もうひとつは「他人のことは他人にまかせておけばよい」という他者への不干渉の考え方です。しかもそうした主張に対して、一般にそのよくない点を指摘しにくいという点に、この問題の奥深さがあります。

ここで哲学者に登場してもらうことにします。私も哲学を学んでいる者として、登場してもらわなければ格好がつかないのです（笑）。哲学者というと、ちょっと身構えるかもしれませんね。また、哲学者は人間ではないという考えをもっている人もいます（笑）。そんなことはありません。哲学とはものごとをよく見る、よく考えるということですから。ただし、このことがじつは難しいかもしれません。

カントに「認識におけるコペルニクスの転換」という表現でいわれるものがあります。たとえば、カメラと人間の目の違いを考えてみましょう。「目で見る」と

はいいますが、「カメラで見る」といういい方はしませんね。カメラの場合は「写す」というわけです。つまり、カメラはそこにあるものをいわば受動的に写し取る。私たちの目も普段そういう仕方では働いているように思うかもしれませんが。そうではなくて、人間はものを自分で選んで見るのです。見る気がなければ、ものは見えてきません。つまり「見る」というのは、能動的な働きだということです。

あるものを認識するというのですが、これはもう対象を知ることですから、当然、対象側から決められるのだとかつては考えられていました。しかし、よく考えると「あるもの」といつてもいろいろなものがあり、見えないものもあるわけです。たとえば善悪の認識。これは見えませんね。しかし、それではそうしたものの認識がないかというところでもない。こうしたことからカントは形而上学的認識においては、人は自分のほうで対象を作り出すのだといいます。形而上学的認識というと難しい感じですが、とりあえず見えないものの認識ととらえておいてよいと思います。

「考える」ということが能動的な働きであるということとは間違いないでしょう。考えようとしなければ始まりません。受動的に考えるということはありません。「考えさせられる」といういい方があり、受動的なようにもみえますが、考えるということはやはり能動です。カントは思惟には「自ら進んで」という性格があり、そこに人間の大きな力があることを見つけたといえます。考える力を人間はもっている、それは世界を（自分の世界）としてとらえる力だといってよい、と。

さて、このカントがふたつの問いを立てています。

- (1) 自分の能力を磨かないことはよいか、悪いのか。
- (2) 困っている人を助けないことはよいか、悪いのか。

はじめは自分に対する問題です。私たちは「努力しなさい」とよくいわれますが、本当に努力は必要なのか。まあ、たしかに能力を磨けばなにかよいものが出てくるかもしれないけれど、別に自分はそのままでなくてもいい、そこそこでいい、と。とくにつらいこと

をするのは誰だって嫌です。能力を磨かなくっても懲りになるということはありません（笑）。

もうひとつは他者に対する問題です。困っている人を見て助ける人、助けない人がいます。これを皆さんはどう思いますか。案外難しい問題ですね。相手にもよるとか、内容によってもいえますから。たとえばバスにお年寄りが乗ってきた。その方は空いている席を探したのですがないので、困った様子をしていました。それを見て、いま座っている自分の席を譲るかどうか。それは自分の判断です。席を譲ろうとして「結構です」と断られた覚えがある方もいるのではないのでしょうか。もし譲らないでいても罰せられるということはないでしょう。

先ほどもいったように、自己満足と他者干渉というのが現代の傾向かもしれません。なにかそれは現代社会に生きる上での自己防衛的な知恵といえそうな気がします。いずれにしても悩むことの少ないほうを選ぶわけです。ただ、人が皆、自身を磨かなくなったらどうなるのか。また困った人がいても一切助けなくなっ

たらどうなるか。おそらく人間的な世界とはいえなくなるでしょう。

カントは、これは「不完全義務」の問題だといっています。前者は自分に対する不完全義務、後者は他者に対する不完全義務、つまり、無条件に守るべき完全義務とは違って、各自それぞれに委ねられた義務だということです。

2 「考える」ということの意義

自分の能力を磨くということに関連して、筆頭に取り上げられるべきものは「考える」ということでしょう。人間の能力の中でもっとも基本的なものは、考えるということだと思います。人間がまったく考えないこととなるか、そんなことは考えたくもありませんが（笑）。

ここで少し絵を見てみることにします。まずルネサンス期の絵です。ミケランジェロが描いたシステイーナ礼拝堂の天井画（1512年完成）の「預言者エレミア」（図1）。そしてラファエロの「アテネの学堂」（1509

図 1



「10年」、ここでは皆が考えています。その代表は前面に描かれた「ヘラクレイトス」（図2）だといってよいでしょう。この姿はまさしくロダンの「考える人」を思わせます。

もうひとつ、北方ルネサンスの巨匠、ドイツの画家デューラーの銅版画で「メランコリアI」と呼ばれるものです（図3、1514年）。この絵は私もよく教材

図 2





図3

として使うのですが、不思議な絵です。ヨーロッパでは中世から近代へ、その間にルネサンスがありますが、その時代になると「考える」立場を表に出してきたといえ、その象徴的な絵です。ここに天使が座っていて、目はかなり上のほうをジッとみつめて考えています。天使に性はないともいますが、この天使は女性のように見えますね。頭に月桂冠を被っていますから、いまこの天使は「考える」ということの勝利を象徴して

いる絵になっています。

この絵はその他にいろいろな仕掛けがあって、全部説明すると大変ですが、上のほうにあるベルは「時刻」を表します。そして、砂時計は「時間」です。それから、秤は「重さ」で、梯子は「上下」の象徴です。さらには「魔方阵」という「 4×4 」のマス目に、1から16の数が埋め込まれています。これは世界の秩序を示すとも見られます。こうして絵の上方部分だけでも、いま天使が想像上に描き出した宇宙が示されているわけです。

下には大工道具が散らばっている。これは思索の下にいわゆる「ものづくり」を置くことを示しています。中世では「考えることなどはやめておけ。そんなことは時間の無駄だし憂鬱でしかない」というような考えがありました。ところが、ルネサンスになると「考えることが、ものづくり以上に大事なのだ」ということを表明するのです。この時代に、それまでは職人技でしかなかった芸術の価値がぐんと高まったといえますが、そこには「考える」ということが重要性をもって

いるのです。あのレオナルド・ダ・ヴィンチはそうした意味で最高峰の人でしょう。

また雰囲気ガラッと変わりますが、日本版の「考える人」があります。一番古いものは4千年近く前の土偶で、「考える土偶」と言ってもよいものです(図4)。素朴ですがどこか人間的ですね。それから、7世紀ごろの仏像に、



図4 青森県八戸市の風張(かざはり)1遺跡出土「類杖土偶」。しゃがんだ姿勢で腕を組んでいる。縄文時代の東北地方で作られた、いわゆる「ポーズ土偶」のひとつ(約3600年前。八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館所蔵)

「^{はんか}半跏思惟像」といわれる仏像

がかなり多数あります。有名なものは京都市・広隆寺の弥勒菩薩像です(図5、国宝)。右足を左足の上に乘せて考えるポーズをとっています。大乘仏教の

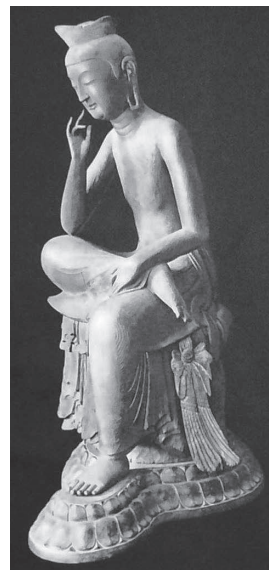


図5

菩薩として「衆生救済」の意味をもっていますから、「人をどうしたら救えるのか」ということを考えているのだと推測できます。

要するに、「考える」ということが、日本を含むアジア地域では古くから大事とされてきた歴史があるので。それは仏教や儒教の影響が大きかったと思われる。孔子の言葉に「九思一言」(人に言葉をかけるときには9回考えて、もっともよい言葉を使うべきという君子の心構えをいう)という言葉があるといわれます。また、教育を重視するという伝統もここにその根を見出すことができます。

もっともヨーロッパでも、古代ギリシアのアリスト

テレスがいったとされる「人間は理性的動物である」という言葉は有名です。理性とは考える力ですから「人間は理性的動物である」というのは、考えることににおいて他の動物より優れているという意味になります。

それから、パスカルは「考える葦」、人間は一本の葦にすぎない。葦というのは弱い植物の代表のようなものですから、自然の中で最も弱いものである。だが、それは考える葦である。そして、「我々の尊厳のすべては考えることの中にある」。こういう言葉がその後が続いています。

このように、考えるということの重要性を、いろいろな人がいろいろな表現で述べています。それから東西の双方にかかわるものとして、英語の「*think*」という言葉がサンスクリット起源の言葉であることを私は最近知りました。「マヌシャ」といういい方があり、このマヌシャというのは、「考える人」という意味だそうです。ですから「人（マン）」は、もともと「考える」という意味を含んだ言葉であるということのようです。

「人間らしく生きる」ために不可欠

どうして人間は考えるのかということですが、いいかえれば考えることにどのような人間的な意味があるのかということです。そこにはなにか大きな意義がある。考えるということに生きる意味がある。ソクラテスに「人間は生きているだけではなく、よく生きるのである」（『クリトン』）という表現があります。これは有名な言葉です。その「よく」という意味が、人間の「考える」ということと関係するところだと思います。

また、ソフトパワーとハードパワーといういい方があります。考える力はソフトパワーである。逆の力、つまり考えさせない力というのはソフトパワーを抑えつけるハードパワーといってよいと思います。まあ暴力ですね、考えさせない力という。この暴力はいたるところにあるともいえます。ですから、考えることが人間らしく生きるためにいかに大事なことかというのは、そういう点からいえます。

このように、「考える」ということが、人間自身をつくる力をもっているのだといってよいということです。

自分をよくするのも、考えるところから始まっていく。更にそれが進めば、世界をも変えていく力にもなっていくわけです。

そして、ここにカントの(1)に対する答えがあるといつてよいでしょう。つまり、人間は自身の能力を磨いていく努力をすべきだということです。考えることによって、人は自身を高め、世界をも動かしていくことができる。考えることをやめたとき、人間は技術や知識に支配されるしかないのです。だからといって罰せられることはないのですが、やはり人間らしさが失われることになりますから、本当はたいへん重要なことだといえるべきでしょう。

カントという人はとくに「考える」ということを、ずいぶん探究した人ですが、はじめは自然科学に強い関心があった。科学的知識こそが知るべきものだと思っていたのです。自然科学の勉強を40歳ぐらいまでして、論文もそのころまでほとんど自然科学の論文です。それらもなかなか味がありますが、ただ40歳のころ、ひとつの転機が訪れます。新しいものの見方というか、

考えることの意味、あるいは目的というか、そういうことに思い至ったのです。

そのときにカントはルソーを読んでいた。ルソーという人は、皆さまご存じのフランスの文学者兼哲学者です。科学的知識の中になにか欠けてはいないかというところ、それは「人間という視点だ」とカントはルソーの『エミール』を読んでバツと気がついたといわれます。それは彼の思想にとつて画竜点睛だといつてよいでしょう。この視点をはっきり自覚してから、カント哲学が人間的哲学として大成していったのです。

3 現代における知、あるいは言葉の問題

少しこだわりますが、今述べたことに関連して、現代の「知」とか「言葉」というものが含んでいる問題をもう少し考えてみます。科学的な知識は、そのまま人間的な知識とはいえないと思います。科学の知識というのは、ものごとがいかにあるか、どのようにものごとが成り立っているかということの説明、そういう性格が強いものです。

私たちとしてももちろんそれも知る必要がありますが、

本当は、どうしてそうなったのか、どうしてそうなっているのかということをもっと知りたいのです。しかし、どうもこの「どうして」という日本語は、かなりあいまいな方なんです。たとえば私が、「どうして、きょうこちらへ来られたのですか」と皆さんに聞いたなら、皆さんどう答えられますか。「電車に乗って」という答え方もできます。これは「どうして」という問いを手段の意味としてとったわけです。でも、それが聞きたいことだったのかどうか。つまり、なにかもう少し別の要素といえますか、「なぜ来たのか」ということを聞きたいということがあるといえます。

「哲学の勉強をしに」という方もいらっしゃると思います。あるいは、「講師はどんな顔をしているか見てみよう」(笑)とか。これは「どうして」という疑問詞を、理由とか目的としてとらえたといえます。この理由、目的は非常に大事な要素だと思います。むしろ、そちらのほうがある意味では本質だと考えられるのですが、それは自分自身のあり方と結びついた「知」というも

のだからです。

一般に「なぜ」という言葉は、聞かれた相手にとっては少しきつく感じます。日本では、ストレートに目的や理由を聞くのは、あまり上品なことではないとされています。そこで、「どうして」というような、目的と手段を一緒にしたようなあいまいな表現を好むのでしょうか、どうも論点をはっきりさせない点は欠点として残ります。しかし、ある意味ではこれも日本的な思いやりといえなくもないんですね。

それはとにかく、「なぜ」ということが理解されてはじめて納得するものです。「なぜ」ならば、そこに自分と結びついた知があるからです。このことは大切なことだといえます。

哲学というのは、「自分と結びついた、もののあり方を探究する」というところに人間らしさがあるといっていると思うのです。フロソフィア、これは「知を愛する」という意味ですが、自分と結びついた知、人間的な知を探究するのが哲学だといっていいのではないでしょうか。人間的な知のことを知恵ということも

できるのでしょう。

ソクラテスの「汝自身を知れ」という言葉、それから「無知の知」という言葉には、そうした人間的な知が示されています。「汝自身を知れ」のほうはすぐに理解できますが、なぜ「無知の知」が人間的な知なのか。「自分は本当のことはわからない」というこのことを知る、自覚することです。ここには人間らしい知があります。これについてはあとでもう一度お話しします。

近代では、とくにカントはそういう意味でチャンピオンの位置を占めています。注目したいことは、ソクラテスもカントもはじめは自然科学的知識の信奉者であつたということです。その経緯については今日はいくわしくお話ししませんが、とにかく自然科学、自然科学を信頼していた。しかし、ある転機が訪れた。この転機はふたりともちょうど40歳のころとされています。自然科学的知から人間的知へ、これを人間学的転回と呼ぶことができます。そしてこのことが、今日のテーマである「時代を築く力」ということに関して、大い

に示唆を与えてくれるように思われるのです。

「知る」ということも、たんに対象的に知るというのではなくて、本当に知るといふのは、自分で考えるという意義をもたなければならないと思います。また、自分で考えるといつても自分と結びついた知にならないければいけないのです。ですから自分が考えて納得したことをもつてはじめて本当の知、つまり「認識」と呼べるものとなるわけです。

しかし、現代における知というものを考えたときに、どうも人間的な知というよりも、人間がいなくとも成立するような知、あるいは自分自身とかかわりをもたない知、これを客観的な知と呼んでいます。そういう知が「本当の知」としてまかりとおっているといわざるをえません。

「言論嫌い」は「人間嫌い」

このことを言葉の問題として考えてみましょう。私たちが普通に使っている言葉はもちろんいろいろなレベルがあるといえますが、大きなとらえ方からですが、

どうも現代の言葉は人を考えさせない、あるいは考える必要がないものが多くなっているような気がします。

ある言葉や文章を聞いたとき、なにかじつくり考えることを必要とする内容をもった言葉と、そうではなく単に聞いて覚えておけばそれでよいといった言葉があります。後のほうは、使い終わったらもうなくていい、忘れてもよいような言葉です。それは考える必要のない言葉、あるいは考えさせない言葉です。考える必要のある言葉というのは、忘れない。考えたことは忘れないものです。どうしてでしょうか。

言葉というものは本来に不思議なものです。「自分の言葉をもった人」はたいへん魅力的な人です。なぜなら、その人の言葉はその人自身と共に生きている言葉だからです。その人が大きく見えます。それに反して、「他人の言葉で話す人」ということになる、どうも魅力が感じられません。その点からいうと、現代社会で流通している言葉というのは、空洞化して、中身がどうもない。外のほうは立派そうに見えるのですが、中に入ってみるとなにもないという感じさえる言葉が

多いように思えます。これはもう人間と言葉が乖離しているわけです。

それから、さらに深刻なことは、私たちは考えたいと思っているのに、考えさせなくしてしまっている状況がある。これは、思考の拉致^{らち}といつてよいと思います。考えようという思いを、どこかへさらっていつてしまいうわけです。すると、考えることも話すこともなにかむなしような気分になってきます。おしまいに言葉が嫌いになります。

言葉嫌い、あるいは言論嫌い、これはミソログスといえます。ギリシア語ですが、ミソは憎む、ログスは言葉・言論。ですから、ミソログスで「言論嫌い・言葉嫌い」です。どうも、現代は「言論嫌い」な人が増えているかもしれません。人と話すことが苦手というより、そもそも嫌なわけです。話そうとしても話題もないし、考えることも面倒だということで、じつさい寡黙になってきます。沈黙しているとなにかを深く考えている人のように人から思われるのですが、じつは考えてもいないんです。しかし他方、社会ではかまび

すしく、無数の空洞化した言葉が氾濫しているんですね。これって、あまり楽しい状態とはいえません。ひよっとしたら現代は、そうした一種の病気が蔓延まんえんしつつあるのかもしれない。

このミソロゴスという言葉は、ソクラテスの『パイドン』という本に出ています。ソクラテスはいいます。「言論嫌いにならないようにしなければならない。なぜなら、言論嫌いほど大きな災いはないのだから。言論嫌い（ミソロゴス）と人間嫌い（ミスマントローポス）は同じような仕方で生まれてくるのだ」と。

ソクラテスという人はもちろんロゴスの人、言論の人でした。とりわけ言論を交わすこと、つまり対話の（ディアロゴス＝言論を通してかわかる）人です。対話に彼は大きな人生の意義を見出していたわけです。人は対話によってのみ、互いに考えを深めることができ、意思も疎通しうる。そして互いに自分自身を高め合うとともに、協力して社会をもよい方向へと変えていくことができる。それがソクラテスの信念だったし、目的でもあったといつてよいでしょう。だからこそ彼はと

くに青年との対話を重んじた。青年とは成長期にある人ですから。青年もまたソクラテスに大きな触発を受けたといえます。

「言論嫌いよりも大きな災いはないのだ。それは人間嫌いと同じだ」というソクラテスの言葉は、ずしんと心にのしかかってくる言葉です。言論から遠ざかることは人間から遠ざかるということと同じだというのですから。言論嫌い・人間嫌いがどのように起こるかということについて、『パイドン』の中で次のように説明しています。

たとえば、ある人が話した言葉を聞いた人はそれを受け入れて信頼した。ところが、実際にはどうもいわれたとおりになかった。そうすると、その人は言葉が信じられなくなつて、遂にはミソロゴス、言論嫌いになる。人間も同じで、はじめはある人を信じていたけれども、いつていることとやっていることが違つてきたときには次第に信じられなくなる。だから、言葉と人間は同じく、「信じられる」ということが非常に重要な要素なんです。

そういうことで、ミソロゴスとミスアントローポス、言論嫌い人間嫌いというのは同じような仕方で行ってくるから、これをどうしても避けなければならぬというのがソクラテスの主張です。ソクラテスは青年に語りかけます。「言論にはなにも健全なものはないかもしれないという考えが、心の中に忍び込むのを許さないようにしよう」と。この言葉は、シニシズムの時代ともいわれる現代に生きる私たちに語りかけている言葉のように思われます。

こうしてカントの(1)の問いに關していえることは、言葉を大切にし、對話を進めていくことが大切だということです。そうしてこそ、自身の能力を高めていくことができるし、それこそが人間らしい価値のある努力といえるからだということです。

4 助け合うということ――

ある哲学者が残した言葉

次は、カントの(2)の問いに關してです。「困っている人を助けなくてもよいのか、あるいは悪いのか」

というこの問いも、これまで述べてきました(1)の問いと關連していますが、さらに他者との關係をどう考えるかという大きな内容をもっています。

この第2の問いも、現代21世紀社会における基本的な問いかけといつてよいでしょう。とくに日本では大きな問題になりつつある高齢化社会の問題でもあります。

ここにもつてきました本は、「東日本大震災に遭った哲学者の遺稿」と記されている本です。この5月に出たばかりの本です。じつは、これを書かれた岩田靖夫さんという方は東北大学の教授だった方で、私の先生に当たる人です。この1月の末にご病気で亡くなられましたが、最後に書かれた原稿が娘さんによって編集されて出版されたものです。『極限の事態と人間の生の意味 大災害の体験から』(筑摩選書、2015)というタイトルです。「最後に伝えたかったこと」と帯に書いてあります。

宮城県南部の亘理^{わたり}という町で震災に遭われて、ずいぶんたいへんな思いをされたということです。昨年の

学会でお会いしたときにはまだお元気で、そのときもお話を聞きました。自分の家は高台にあったから大丈夫だったといわれていましたが、仙台に娘さんがいて、3日間どうしても連絡が取れなくて非常に寂しい思いをしたとのこと。3日目にやっと連絡が取れて、仙台から亘理にやって来てくれて本当にホッとしたということを書いておられました。いくら年をとつても、親はやはり子どものことを一番心配するものですね。

じつは岩田先生というのは、ソクラテスの研究者です。古代ギリシア哲学研究の第一人者で、文化功労者選ばれておられます。私もいろいろお世話になりましたが、先生は背の低い方で、考えてみると、本当にソクラテスが生まれ変わったような方なんです（笑）。とにかく人と話すのが好きで、82歳でしたが、若い連中と対等に本当に生き生きと話をされます。皆さんも先生のところに寄って来て、話を聞きたがります。

この岩田先生の指摘ですが、こういうことを本の中でおっしゃっています。

「人間はなにを喜びにして生きるのか。それは、他者

との交わりである。他者を愛すること、他者から愛されること、他者を助けること、他者から助けられること、それが人間の喜びである。他者（人間）は自由な存在者として無限の高みに立っている。その他者から声をかけられ、手を差し伸べられ、助けられ、愛されるところということは、自分自身の力では獲得できない畏るべき肯定を贈られることであり、それ故に、畏ろしい喜びをわれわれに与える」。この「おそれる」「おそろしい」という言葉は、「かしこむ」という漢字ですから、畏敬の念をもつという意味です。「畏ろしい喜び」とはたいへん深い喜びです。この本にはこういう人間存在論が展開されています。

これは、まさに大震災の体験のあと数ヵ月後に書かれた文章です。まあ高台に家がありましたから命は大丈夫で、家もなんとか大丈夫でしたが、周りではたくさんの方が亡くなっています。あそこは、津波でたいへんな被害があったところですから、亡くなった方がたくさんおられたわけです。

「助け合う」ことの喜び

『「助けてくれ」と叫び合った』とも書いてあります。

人間は本来なにももたない裸の存在ですが、裸になったとき、人間は人に助けを求めるときがある。それを聞いたときに、助けざるをえないという気持ちで働くという体験を述べられています。自分もなにか人を助けたし、自分も助けられた。そのとき、ものすごい喜びがあった。これは言葉ではいえないような喜びだった、と。そして次のような文章が続いています。

「現代社会は、科学技術の発達と個人主義の蔓延により、『人間は一人でも生きてゆける』という思想を流行^{はや}らせている。この大災害は、それが本当ではないことを確証した。人は、大昔から、他者との絆によって生きてきたのである」と。ここでいわれている個人主義は自分中心主義という意味の個人主義でしょう。実際、現在でも福島原発の事故がまだ続いている状況ですが、背景には科学技術への信頼、それから経済至上主義といった原理があったことを指摘されています。こうした技術的原理だけで人間世界が動いているわけではな

くて、やはりもっとも大切なのは倫理である、といわれています。

この「助け合う」ということが、じつは人間にとつてはまったく自然な生き方だということを、私たち現代人はもっと深く考える必要があるように思います。助けるといっても、なにか意識してボランティア活動とかをやるのとは違う。助けるということは人のためということであるのですが、それはまた自分自身のためである、というのは本来助け合うのが自然な生き方なのだからということです。「情けは人のためならず」です。だから、助け合うということを通して本来の自分になることができる、それが非常に嬉しいという感情を生むのだといつてよいでしょう。

先日、テレビを見ていましたら、本年のノーベル賞を受賞された大村智^{さとし}先生がいわれていました。おばあ様から「科学者というのは人のためにしなければだめなんだ」といわれたという話でした。それから梶田隆章先生も「いろいろな人のお世話になって」と、異口同音にそういうことをいわれます。たいへん多くの人

にお世話になっていという。大村先生は、微生物の研究でいろいろな薬を見つけられて、一番世話になったのは微生物であるという（笑）、そういういい方もされていました。面白い人だなと思いました。

でも、考えてみるとそのとおりかもしれませんね。いろいろ生物は助け合っていて、微生物にはたくさん人間は助けられていると思います。人間も、体の中にいろいろな微生物をもっています。それが、自分の身体を健康にさせているのだといわれています。

もちろん、話は人間のことですが、ここにはカントの「困っている人を助けることはよいことかどうか」という問いへの答えが、すでに与えられているといっています。つまり、助ける、助けないというよりも、人間は根本的に助け合って生きているのだということですよ。

人気アニメにアンパンマンというのがありますね。困っている人を見るともうなにごんでも助けに行く。じつは雨にぬれてもしょぼんとするように、ほんらい彼自身は弱いんですが、このときだけは強い。彼の行

動原理は社会正義のためといったような大げさなものではなく、おなががすいた人に食べ物あげるというように、ごくふつうの生活の中で動いている。そういうやさしい兄さんのような、身近な頼れる存在というところが人気の秘密だと思います。

「存在するものは本来、他者との関係の中にある」ということは、仏教では縁起といいます。この世界は縁起世界である、人間も本来他者との関係、関連の中で生きている。すると、私になにかをすることには、他者にとってもなんらかの影響があることになります。

縁起、これは「共生」という最近広く使われるようになったもののあり方の原型です。仏教の思想は、そうした根本的な、深いものの見方を教えてくれます。これに対して、西洋ではあまり縁起ということはいわれてこなかったわけです。しかし、西洋の考えにも深いものがある。そして、ここに東西が会合うものがあるように思うのです。それを次に少し考えてみます。

個人主義と孤人主義？

私たちは「個人主義」といういい方をよくします。

これは、概してあまりいい言葉ではないようにいわれているのですが、じつはそうではなくて非常にいい言葉だと思います。どういふことかといえますと、個人主義というのは個人個人を尊重する立場のことですから、これほどいい立場はないのではないのでしょうか。一人一人を大事にするのが個人主義です。よく「利己主義」とごちゃまぜになっています。「利己主義者」というような意味で「あの人は個人主義者だ」と非難する言葉として使ってしまうのですが、それは正しい使い方とはいえないということです。

個人というのはもちろん一人のことを意味します。一人が大事です。一番の最小単位であり、最後のものがindividual、つまり「分けられないもの」です。だから、究極の存在、かけがえのない存在です。人間はみなそうした存在だということです。

一方、同じ「コジン」と呼んでも一人ぼっちの人、いわば「孤人」、こちらはいくぶん違います。つまり、こ

ちらは他人と自分をあえて切り離しています。孤立を強調する「孤人主義」があるわけですね。ですから、「個人主義」と同じ発音ですが、相当内容が違います。「個人主義」という言葉は私が始めて作った言葉かなと思いますでしたが、違いました。ネットに「孤人主義」という表現をしているものがいくつかありました。やはり私と同じように考える人がいるんだと思います。

本当の個人主義者というのは、一人一人を大事にするという意味で非常に思いやりができる人であり、非常に深いところで人とつながることができる人です。そういう意味では、個人主義は人間主義といってもいいです。

あとの孤人主義というのは、「自分だけ」という考え方になってしまふ。これは利己主義と結びつく。人でも会社でも他者の利益とか福祉を考えず、自己の利益だけを守ろうとする傾向をもちやすい。ときには法律や条例を無視さえもする。たとえば、最近もドイツの車の会社ですが、排気ガスの検査をクリアするために、検査の時にだけ排気ガスの浄化装置が動くようにした

という、ちょっとひどいカンニングだと思いますが、そういうことをやりました。会社だけの利益を考えるとそういうことも考えられるのかもしれませんが、それはもう孤立主義です。要するに、社会のためではなく自分のためだけです。

そういう考えには、どこから大きなしつぺ返しが来るものです。じつは「孤立 (isolation)」という言葉には、分離とか隔離という意味、あるいは絶縁という意味もあります。他者と自分を隔離する、完全に切り離すということは、逆からいうと、相手あるいは社会の側からこちらが隔離されたということでもあるわけです。両面から見ないといけないわけです。つまり、自分が孤立することは別に悪いことではないようにも考えられますが、それはじつは社会から孤立させられているととらえるならば、これは由々しき事態です。

政治について考えてみると、ある意味では人間がバラバラのほうがやりやすいわけですね。皆が連帯して反対してくるとなると、政治もなかなかやりにくい。そうではなく、孤立している、バラバラでしたら権力

の行使がしやすいといえます。だから、孤立というのはじつはたいへんに自分が損をするということがあるとも考えられます。

個人主義のほうは孤立とは違います。基本的には個人主義はすべての個人を尊重することで、そこでは助け合うということ、あるいは共闘ということももちろん可能です。

5 人間とは人の住む世界のこと

そこで「人間」という言葉があります。『広辞苑』という辞書、この辞書は語意が歴史的に古いところから書いてあつて便利です。「人間」という言葉を引くと、はじめに「人の住む所。世の中。世間。じんかん。」とあります。これが古来の用法だといえます。日本語の読みとしては「にんげん」(呉音読み)と「じんかん」(漢音読み)があることがわかります。しかし、どちらも同じく「人間」のもとの意味は人のいるところ、人の住む世界をさすわけです。これは、江戸時代まではほぼそういう意味で使われていたということです。「人間万

事塞翁^{さいおう}が馬」「人間到る処青山あり」「人間五十年」（敦盛）の「人間」はすべて世の中のことです。

ところが、明治になって西洋語の翻訳の影響があったのだと思いますが、「人間」と「人」とは同じ意味になつてしまふんですね。世間というような意味は薄らいでしまつて、「人」と同じ意味になります。ここから人間という言葉がなにか社会性そのものをなくしてしまつた感じがします。むしろ、現代の人と人との交流のあり方を考えますと、人間は世間のことだという見方のほうがむしろ現代的かなと思います。ですから、古来の日本語ももう一度見直すべきですね。和辻哲郎という人は、古来の人間の意味にこだわった人です。これを「人の間（あいだ、ま）」と読み返し、空間、時間の意義をそこに把握しようと、ユニークな人間存在論を展開しています。

先ほどソクラテスの「対話」ということを話しましたが、ソクラテスは常に言葉で人と人を結びつけようとしたし、自身も言葉でこの世界と結びついていたといえます。それは、非常に言葉に信頼をおいていたか

らこそということですが、人を信頼するのも、やはり言葉を信頼するということから成立しているのです。

言葉のもつ意義は深いものがあるわけです。言葉をと人と取り交わすのはたんに情報を伝達するということだけではなくて、相互に広い世界をつくる。言葉、文章によつて人間同士が結びついていく。また広いだけではなくて、深い世界をつくる。奥に深まるという、非常に重要な意義があるわけです。ソクラテスは、まさにそれを実行した人です。じつはコミュニケーションということも、ここに本質があるのではないかと私は思っています。

ソクラテスはいろいろなことを教えてくれます。ソクラテスは言葉の使い方、私たちが忘れかけているような観点を教えてくれます。「ああ、そういうとらえ方をするのだ」と。ソクラテスの本（プラトンの対話篇）を読んで感動するのは、言葉の大切さがわかった時です。

「汝自身を知れ」と「無知の知」

外側だけではなかなか人間はわからない。「汝自身を

「知れ」という有名な言葉があります。「汝」というのは「あなた」ということです。いわれた側からいうなら「わたし」です。この言葉は神殿の額に書いてあったといえますから、いわば神から人間に贈られた言葉という意義をもっています。とすると「汝」とは人間すべてをさすともいえます。「汝自身を知れ」とは「人はすべて、自分の分際をわきまえなければいけない」というような意味だったといわれます。人間に謙虚さを求めた道徳的教訓だといえます。しかし、ソクラテスはあえてこの言葉を人間側に引きつけて理解しました。「人間は自己の本質を知るべきである」ということです。自己の本質のことをソクラテスは「魂（プシユケー）」というのです。それまでは魂はなにかよくわからない生氣のようなもの、死んでしまえばどこかへ飛んで行ってしまうものと考えられていましたが、ソクラテスはまさにそれこそが人間の本質だとしたのです。

あと、「無知の知」という言葉が有名です。不思議な言葉ですね。これはわかりにくい言葉ですが、「無知を知る」とはどういうことか。これは背景を知るとよく

わかります。……ソクラテスは賢い人だといわれたけれども、彼の弟子がそれをもつとはつきり確かめようということで、神託といいますが、当時は、アポロンという神様の神殿にお告げを聞きに行ったわけです。そしたら、「アテネで一番賢い者はソクラテスである」というお告げが下ります。

その弟子はもう喜び勇んで帰って来て、皆に報告します。しかし一番不審に思ったのはソクラテス自身で、常々自分はあまり頭はよくないと思っていたから、「神様はどうもおかしなことをいうな」と思った。ただ、「神様のいうことだからなにか意味があるのだろう」ということで、それでは自分で確かめるしかないということになり、自分よりも知恵のあると思っている人、そして皆にもそういわれている人のところへ行行って対話をするわけです。そうすると、わかってきたことがあります。最初に政治家のところに行ったといえます。政治家は世の中を動かす人ですから、あらゆることを知っていなければいけない。深いことも知っていなければいけない。

話していると、たしかにいろいろな知識はもっている。あるいは、技術的なことは知っている。でも、なにか魂にとって本当に大切なものについては、話してもどうも出て来ないということがわかった。だから、それについて彼は無知だ。ソクラテス自身も、そういうしたことについて「自分もわからない」といっています。一番奥にある知というのは誰にもわからない。でも、ソクラテスは自分がわからないということを知っているのに対し、政治家はそれを知らない。無知にいても知らない。いわば「無知の無知」です。ソクラテスは「無知の知」ですね。それから政治家だけではなく作家や職人のところへ行っても無知の無知。彼らはその道ではたいへん自信をもっているのですが、魂、いいかえれば自分自身についてはよくわかっていない人たちです。

ソクラテスはそのうちハッと気がつきます。自分はないか神から与えられた役割をもっている。つまり、人々に無知を知らせるという。あまりよい役割とはいえませんが（笑）、これはじつは重要なことなのです。

無知を知らないと探究の心は生じません。ソクラテスは無知を知っていることにおいて、知の探究者（フィロソφος＝哲学者）です。同じ無知でありながら、向上の努力をするかしないかということがここで分かれるのです。

ですから、なんとかして相手にこのことを教えようとするのですが、たいへんな作業です。「あなたは自分が無知だということを知らないんですね」、面と向かってこんなことをいわれれば、相手はカッとするでしょうね。しかしそこはソクラテスの粘着質というか、もう徹底して相手にぶつかっていきます。神から与えられた役割ですから、おろそかにはできません。それがどうも訴えられてしまうということにもなるのです。

まあ、そういう内容を「無知の知」という言葉はもっているわけですが、この言葉が先の「汝自身を知れ」と深く関係していることもよくわかりますね。ソクラテスの言葉というのはひとつひとつ吟味していくと、本当に深いものがあつて考えさせられます。

人間関係というものは、そこまでいって本当のもの

なんでしょうね。互いに触発し、啓発し合う。だから、大いに話し合う、語り合うというのが人間関係の基本といってもいいわけです。言論というのは、まさにそこに生きてきます。話し合うということが人間のあり方で、人間が二人いて話し合うというよりも、話し合うから人間なんだということです。先ほどの「人間とは世間」ということと似ています。

そのくらい、言葉というものは人間のあり方、生き方と非常に深い関係をもっている。だから、ミソログス、言論嫌いは最悪だということになります。それでは、静かな人はミソログスかというと思わずしもそういうことではないのです。じっと考えている人はいるわけで、それは自分と対話をしているともいえます。自分の中でまさに言論活動をしている、ときには激しい言論戦を展開している。その相手は自分だといってよいと思います。考えるというのは、自分自身と言葉をやり取りすることですから、そこに発展があり、深化があるといつてよいと思います。そのように、いろいろ結びついています。

人間的努力にこそ時代を築く力が

今日はソクラテスとカントしか出てこないのて安心してください（笑）。カントは人間を自律の主体として尊厳なるものと考えました。つまり自分で考えて決定して行動する主体が自分自身だということです。これ以上のものはないわけです。もちろん人からいわれて行動する場合もありますが、それも自分の判断を通して、自分もそうだと同意して動く。ですから自由な思考、自由な行為ということがたいへん大事です。いわれて、そのとおり動くだけとなると、いわば奴隷ですね。やはり、「自分が考える」というところが中心になります。

ですから、その考えを高める、深めるという作業は不可欠だといえます。自分自身の能力を磨くということ、それは自分自身を高める、深めるということです。人間はみな学びたいと思っていると思うんです。皆さんがどうも小難しいような哲学の話を聞きに来られるということも不思議なことです。人間はなにか深いところで、自分を知りたい、わからないことをわかった

いと思っているのではないかということです。どこまで行ったら終わりなのか、多分終わりはないといえそうです。学び続けるというこの働き、いわばどこまでも成長したいという内面的な欲求はたいへん尊い人間的なものだと思います。

それから、個人の話をしましたが、一人が大事ということ、皆が助け合うという共生のあり方とはどういう関係にあるのかということです。これもカントを読むとはっきり書いてあります。つまり、人間というのはお互いに尊敬し合うということが本来のあり方だということです。

つまり、他の人を手段としてのみ扱うのではなくて必ず目的としても扱うべきだとカントはいいます。理性をもった人間、人格は究極のものですから目的です。人間をたんに手段として、犠牲とするようなことは認めることはできません。人はお互いに自身の目的として、つまり互いに尊敬し合うという関係をもつべきである。ここにカントの人間学、それが成り立った理想的な世界が語られます。カントはこうした人が相互に

尊敬し合う世界を、「目的の国」と呼んでいます。カントが晩年に書いた『永遠平和のために』という書があります。ここには「目的の国」の考え方がベースにあって、国家同士が互いに尊敬し合うという国際平和論が展開されています。

カントは『人倫の形而上学』という本の中で、私たちにとって重要なことは「自己の完成と他者の幸福である」ということを述べています。これは人間の価値ある生き方を要約して述べたものです。自分に対しては自分の能力を磨く努力をする。そして他人に対してはその人格を尊敬し、その人が幸せになるために助力していく。カントはこうした生き方に人間の人間らしい生き方を見たといえます。そしてこれはソクラテスのいう「よく生きる」ということと通じていると思うのです。私は、このカントの考えは21世紀の大きな課題である、互いに助け合う社会、平和世界の原理として、依然として有効なものではないかと思っています。ここに、これまでの話のまとめとして要点を図示しておきます。

(現代社会)		(問題)		(転換の要点)	
(1)	科学技術の世界	人間の奴隷化・言論嫌い		思索・言葉を大切に	
(2)	高齢化した社会	人間の孤立化・人間嫌い		助け合うことの喜び	
				(カント)	
				自己の発展 他者の幸福	

おわりに

おわりに、今日の内容に関する本について少しご紹介したいと思います。

ソクラテスに関しては、3部作といってよい重要な本を3つあげることができます。ソクラテスの生涯に触れた本として、第1に『ソクラテスの弁明』という本があげられますが、これはまさに裁判を受ける時の話です。たいへん臨場感が溢れたものでし、読んてたいへん感動します。裁判ですから原告と被告がお互いにいい合って最後は裁判官の採決によるのですが、当時の裁判官は5百人ほどの民衆自身でした。こうした裁判が果たしてよいものかどうか知りませんが、ソクラテスは自分を守ろうという気はあまりなく、自分の行為の正当性だけを述べています。周りではハラ

ハラするわけで、最後は死刑の判決となります。そういう臨場感に満ちています。

つぎに『クリトン』という本があります。クリトンという人はソクラテスの古い友人です。クリトンはなんとかして、いまいる牢獄から助けようとする。それに対し、ソクラテスは絶対ここから出ないという。冤罪ですから、国外脱出を図ってもよいかと思ってしまうのですが、ソクラテスは、それは正しくないことだと拒否するのです。この本は法律をやる方はよく問題にされるようです。

そして『パイドン』という本、ここにはソクラテスがなくなる日のことを書いてあります。先ほどのソクラテスのミソロゴスの話も出てきますし、若いころの自身の話もあります。先ほどご紹介した岩田靖夫先生訳の岩波文庫のものが小見出しもつけられていて一番

わかりやすいと思います。この本はじつはたいへんな内容をもっていて、分量はそれほどではないのですが、1日ではまず読めないものです。他の2冊は大丈夫ですが、『パイドン』に書いてあることは、じつは生命の永遠性（魂の不死）についてです。おそらくソクラテスという人が最後にいいたかったこと、残しておきたかったことは、この生命の永遠性についてではなかったかと推測されるのです。

つまり、魂は不死（不滅）だということをソクラテス自身は確信していたといえますが、他の人がそれをわかってくれるかどうかという悩みをもっていた。いろいろと対話していくのですが、なかなか青年はこのことがわかりません。「先生、まだよくわかりません」というんですね。この魂の不死ということは、生命の尊厳ということと密接で、たいへん重要だと思っています。これをどのように人に伝えることができるかということとは最大の問題という感じがします。ある意味で、宗教というものはそのためにあるのかもしれませんが。とにかくこの『パイドン』という本は、そういう意味に

おいて21世紀の最大の課題を含んだ書物ではないかと私は考えています。

それから、カントですが、カントの本はなかなか難しいものが多いので、ここでは個別の本の紹介をしないことにしますが、彼の考え方の根底にはたいへん人間的なものがある、人間主義に溢れているという感じがします。またそういう思いで読むとすつとわかるという気もしています。私も、じつは大学院の時代は理屈で考えるのが好きで論理学をやっていました。ヘーゲルの弁証法を学んで、もう何でも論じられるみたいな気持ちになってしまったことがあります。それで「ちょっと待てよ、違うかもしれない。もっと大事なことがあるかもしれない」と思った経験があります。その点、カントは人間的なものの見方を教えてくれるという気がします。いまでも、学ぶほどにそうだなと思います。

たとえば、人間は幸福を誰でも求めている。ところが、よいことをすれば幸福になるかというと、これは現実に必ずしもそうならない場合がある。つまり、道

徳的に生きることが幸せということとイコールにならないという問題があります。この問題は非常に深いところがあります。悪いことをして幸福になるというのはおかしいのですが、でも、外見的にそんなふうに見える場合さえあります。

カントは、「それはおかしい」と考えます。やはり、よいことをした人は幸せになるべきだと考えるわけです。しかし人間の生がこの短い一生で終わるとしたら、「この世では現実的な幸福は叶わないかもしれない」とカントはいうんです。まあたしかに、どんなよいことをしても、この世で自分の願いが全部叶うということはないでしょうね。でも、「幸福になるべき」という原則がありますから、それが成立可能となるために魂が不死であることが要請されてきます。すると幸福になるということが可能となるのですね。ゆえに魂は不死、生命は永遠である、と。ちよつと不思議な考え方ですが、素晴らしい考えでもあります。

生命の永遠性というのはもつとも難しい問題だといえますが、これも人間主義、あるいは生命尊厳の立場

から理解していくことができるように思うのです。そういうところは、ソクラテスとカントは非常に似ている面があります。たまたまかもしれませんが、ソクラテスとカントを合わせると、「SoKa そうか」となりますね（笑）。

ちよつど時間になりましたので、ここまでにいたします。ご静聴ありがとうございました。

（いしがみ ゆたか／創価大学教授・
東洋哲学研究所主任研究員）